

## 平成 26 年度 第 1 回 槻の木高等学校 学校協議会 記録

本年度第 1 回学校協議会は、3 年生が勉強合宿を行っている高岳館に場所を変え、委員の方々による生徒の自習状況の視察の後行われた。

なお、委員から互選で澤田裕委員が会長に選出された。

<開催日時>平成 26 年 7 月 26 日 (土) 16:00~18:00

<開催場所>関西大学高槻キャンパス高岳館

<出席者>

[委員] 澤田 裕 会長、浅野良一 委員、柿原勝彦 委員、  
北山茂治 委員、芝井敬司 委員、宮坂政弘 委員

[学校] 平野裕一 校長、奥谷彰男 教頭、小梶芳忠 事務長  
山本 尚 首席・学校運営室長、田中 眞 首席・生活指導室長  
奥本雅俊 学習指導室長

<話題提供 (山本首席) >

槻の木生徒、中学生、大学、社会、コミュニケーション、授業の「変化」に対して、槻の木高校はいち早く対応すべきとの意見提示

<協議概要>

浅野委員

一点目は、さまざまな「変化」への対応は、受け身であってはならない。

戦略論的に言えば、何かが起きてから「環境対応戦略」するのではなく、周りに対して、変化を起こす「提案戦略」が重要。槻の木高校はこれまでも、保護者のニーズを先取りし、働きかけて、掘り起こすという「提案戦略」をし、周りの府立高校に影響を与えてきた。

二点目は、生徒に対して、変化に対する姿勢を育てるためには、意図的に壁を作ること。例えば教科や行事で少し困難な状況を生徒に与え、それを乗り越えさせる。グローバルリーダーズハイスクールなどで課題研究や行事を通じてそのような取組が見られる。生徒に任せてぎりぎりまでしんどい思いをさせて突き詰める経験が大切である。そのような変化の壁を乗り越えさせる仕掛けが必要である。

三点目は、大分県立日田三隈高校によい実践がある。話題提供の中で、「良い大人の見本を生徒に見せる」との提案があったが、日田三隈高校の実践は、「三十歳のレポート」という取り組みで、2 割ほどの回収率があり、高校卒業約 10 年後の自分を語るというもの。レポートを読むと全員が順調ではなく、変化に富んだ人生を歩んでいる。そこがよい。先輩を生徒に見せることが大切である。

平野校長

1 期生が社会人として活躍する時期になっている。二十歳の集いで卒業生に合うと、さすが槻の木の卒業生だと感心するが、生徒の前で卒業生が話をする機会があればよいと思う。また、生徒にとっての壁ということ言えば、部活動で困難に打ち勝つ体験がそれに当てはまる。生徒の様子を見ていると、いろんな葛藤も含め、結構乗り越えるべ

き適度な壁になっているようだ。

#### 芝井委員

話題提供の中で、教員になりたい梶の木生が教員に大切なものとして、プロ意識をあげた者が少ないとの指摘があったが、高校生はプロ意識ということをしっかりとはつかめていないのではないか。大人の社会はテレビで見るイメージ程度であろうし、実際に働いてお金をもらってはじめて、プロ意識や責任感を感じるのであろう。だからこそ、早めにプロ意識が必要とのメッセージを発することが大切である。プロ意識は社会人として不可欠で、例え職業が変化したとしても必要となるものである。

もう一点は、社会が戦後の平等性の高い社会から脱却していることである。最近の学生は結果の平等性を求めている。起業が大切だという意識も高く、収入が低くても努力がなければ仕方がないとの認識である。同一賃金を嫌う傾向にあり、努力に応じた格差を容認している。とはいえ、安定的な社会を作っていく必要があり、貧困に陥らない努力が求められる。学校からもそのようなメッセージを具体例を出しながら生徒や保護者に示してほしい。ハングリー精神がなく、大事に育てられている子供たちで、しかも社会の下位層にいる人々をどうするかが課題となる。

#### 宮坂委員

高度成長モデルが成り立たなくなり、モデルが示せない時代になっている。「これさえやっておけばよい」ということが企業でも通用しない。

しかし、学校では変えてはいけないことをしっかりやる必要がある。

プロ意識がある人は、それぞれの発達段階で何かを身につけているはず。社会人が高校時代をどのような資質を身につけたかを分析し、こういうことをすれば将来責任をもってやり遂げられることを示してほしい。また、教科でも、教科内容以外に生徒に身につけさせたい力（例えば集団として身につけたい力など）を設定して、どのように指導するかを考えることが重要である。行事でも学校で身につけさせたいことが何であるかを分析し深め、学校として示してほしい。

#### 澤田会長

「変化」を認識できるのは過去を知っているからであり、中高生は変化を長い間見続けていない。例えばスマートフォンによるコミュニケーションは中高生にとっては当たり前であり、手紙など他のコミュニケーションを知っている我々であるから「変化」が理解できる。過度に「変化」を気にする必要はない。それより「変化」を作る方が大切である。今後予想される変化について伝えてほしい。

学校説明会の参加者が増えたとのことだが地域的な偏りはあるのか。

#### 事務局

高槻市内・外とも同じように増えている。

#### 平野校長

教育には不易と流行とがある。生活規律や学習習慣など不易の部分は、梶の木では指導体制が確立している。今の時代の「変化」に対して、流行を追うという意味ではなく、対応していきたいとの思いがある。

#### 北山委員

どの高校も特色があり、中学校では学校説明会への参加を指導しているところ。自分に合った高校を選ぶことが重要である。複数校の学校説明会に行く生徒もいる。

澤田会長

広い範囲から生徒が来てくれることは学校づくりの観点からも歓迎する。多様な生徒が集まってくればよい。校長から部活動が生徒にとって壁になっているとの話があったが、中学校の部活から高校の部活が生徒の主体性が飛躍的に尊重される。一方で、槻の木で学んだあいさつやマナーはどこでも通用する。「変化」の先取りをお願いしたい。

平野校長

学習面での新しい試みとして、3年の日本史で夏休み前に取り組んだレポート課題を紹介し、槻の木のさらなる可能性について報告したい。

単に課題を与えてレポートの宿題を出したのではなく、課題は自由で、その課題を探すために、学校図書館に連れて行き、資料の探し方やレポートの書き方などをレクチャーした上で生徒に資料探しを委ねた。講義形式の授業の予習・復習に長けた生徒が多いと思っていたが、このような調べ学習に対しても槻の木生は積極的な態度を示し、予想以上によいレポートが提出されたとのこと。時期的にも、一定日本史の基礎知識の習得を終え、大学受験まで少し時間のあるタイミングに行ったのが良かったようである。

このような取組を校内研修等で教員に広めていきたい。

柿原委員

自分の70年の人生を振り返り、人づくりの大切さを感じる。カメラマンとして7年間修業をしてプロ根性を身につけたが、それは一流になりたいという思いからであった。プロは孤独なものだが、高校生にはなかなか理解できない。昔は子供にひもじい思いをさせないという感覚があったが、今の貧困は衣食住は一定満たされた上での話である。自分では目標をもって生きてきたが、短大生に聞いても「目標は別にありません。」という回答が返ってくることが多いし、読書もあまりしていない。社会に出てからは勉強をする時間がないのだから、学生時代に本務である勉強をしっかりさせてほしい。また、家庭での会話がなくなっているのも最近の傾向である。若い人はどうして良いのか分からないというが、背中を押して勇気を出させるのも先生の役割ではないか。

平野校長

大学受験で進路に悩みを持つ生徒も多い。そういう場面で教員の一言が生徒の背中を押すことにつながる。

山本首席

先日も生徒から志望校の変更についての相談を受けた。生徒は、志望校変更はよくないことと思っている節がある。一つの目標に一直線に向かわせる指導を教員はしがちであり、そこから外れることを教えていない。変化を恐れるあるいは悪いことと思っている槻の木生は多いのではないか。

プロ意識について、教員に必要なものとして上位にあげる生徒が少ないとの報告をしたが、上位にあげる者もいる。プロ意識は精神性に係る因子で、スキルやテクニックを上位にあげる生徒より、将来性があるように思う。そういう感性を持つ子は強い。

芝井委員

少し暴論だが、叶えられないような目標を持つこともよいのではないか。「世界を救うために生きてほしい。」など、自己実現のために目標を持つだけでなく、社会のために生きていくという志のようなものが必要である。ハングリー精神を持つことが難しいからこそ、あえて、高い理想や志を学校が提示して求めてもよい。そのことが他の学校にない特色になりうる。

澤田会長

そうなれば、大学以外の進学先を考える生徒が出てくる可能性もある。

北山委員

槻の木高校を選ぶ中学生は、勉強を前向きにとらえている生徒が多い。大学進学についてもしっかりと目的意識を持たせ、幅広い進路選択ができるよう指導をしていただきたい。中には勉強が大変との声も聞くが、槻の木高校に進学した卒業生も多数、目標とする大学に進学している。

中学校での教科指導や生徒指導もここ 10 年変化している。生徒指導も力で抑える指導から納得がいく指導が求められている。授業においては思考力、表現力、判断力を育成する方法として、講義形式ではなくグループ学習やディスカッションをして発表するなどの形式の授業を行うようになってきている。それが授業規律の確立にもつながり、学力もついてくる。教員には、これまでの指導力に加えて、生徒に働きかけるテクニックも必要とされている。

我々が先を見て、変化のよしあしを見極める教育をしていくことが大切だと感じた。

宮坂委員

これまでの学力に関する議論をまとめると、学力には、教員ら生徒への知識の伝達を重視する従前型の「行動主義的学力」と、生徒の経験から構成される学力を生徒が自ら獲得していく課題学習型の「構成主義的学力」があり、そのうち、「構成主義的学力」をどのように身につけさせるかということ。

例えば、図書館の活用について日本史での取り組みが紹介され、今日の行政評価では図書館のメリットを貸出冊数や来館者数だけで効果検証をしているが、個人で構成される知識を図書館という場で議論したり、持ち寄った知識を高めあい学力を共有するなどの公共圏としてとらえて議論をしてほしい。学校から構成主義的学力を身につけさせる方策を先進的に提案してほしい。

浅野委員

高校は小中学校に比べ、同一性の高い生徒層が集まる場である。槻の木高校の場合、几帳面で周囲から取り残されるような生徒、入学前に学力などが伸びきって伸び代の少ない生徒へのケアが必要だと考える。

グローバル人材が話題になるが、それぞれの能力に応じて、英語が流暢でなくても堂々と外国人と生活ができるような人づくりが必要である。槻の木高校が取り組む「English Camp（英語漬けの宿泊行事）」は興味深い。

平野校長

槻の木生の実情を踏まえた提言をいただいてありがたい。今日は勉強合宿での学習の状況も見えていただいたのも実際に生徒を見ていただきたかったからである。

#### 芝井委員

大学の状況を言うと、30 大学が「世界で通用する大学」としてのグローバル化の取り組みが今後進み、大学の二極化が進もうとしている。これから 10 年で5人に1人くらいの割合で留学生が日本の大学で学ぶ時代になり、外国人と議論しながら授業が行われるようになる。しかし別に恐れる必要はない。

#### 山本首席

オールイングリッシュで募集。あえて細かな内容を提示せず募集した。一定の覚悟を求めた。16 人が希望しているが生徒に冒険させたかった。槻の木らしい取り組みにしたい。

#### 柿原委員

高校生にはどんどんと勇気をもって挑戦させてほしい。そして、生きる力を育ててほしい。例えば、ランニング後へとへとになったときに英語で交わした会話は忘れない。そんな体験をさせてほしい。遊ばせてやってほしい。先生方も試行錯誤を恐れる必要はない。

#### 司 会

各委員から一言ずつお願いします。

#### 浅野委員

教科を動かそうとする校長のマネジメントは組織論から言っても間違いない。若い先生方を中心に、授業改善にチャレンジをお願いしたい。変化に強い槻の木高校に。

#### 北山委員

中学校も頑張れる生徒を高槻市内から送りたい。いろいろなところで活躍できる生徒を育ててほしい。

#### 柿原委員

勇気とチャレンジ精神をもち、明るい生徒・学校づくりをお願いします。

#### 澤田会長

大学や専門学校に行くことが最終目的ではない。卒業 10 年後、大学を卒業後、どんなところで槻の規生が活躍しているか把握し、クローズアップして PR するのもよい手法である。

#### 芝井委員

今後の世界を考えると、変化を乗り越えることのできるような志を持たせてほしい。これは豊かな時代に生きる者の責務であるし、先生から生徒に伝えてほしい。「何のために生きているのか？」社会に何らかの形で関わっていくというメッセージが必要である。そうすれば、日々やっていることの意味もはっきりする。

#### 宮坂委員

イノベーションを起こしている産業に共通して言えることは、認知構造の近接領域に集まっているところである。学校も認知構造の近接領域を生かし、生徒の学力を生徒同士でどのようにして向上させるかを、学校としてチャレンジしてほしい。

もうひとつは、例えば万葉集を読んで感動・共鳴できるような日本人としての良さをアイデンティティとしてもった子どもを育ててほしい。